

戦間期における学生の読書実践

——東京帝大新人会の共同性の模索——

後藤 美緒*

本稿は、戦間期の学生団体である東京帝大新人会（1919-1929、以下新人会）が行った読書実践を論じる。その際、とりわけ諸活動を遂行していく中で新人会が得た「科学から空想へ」という着想に注目し、着想にいたる論理を分析することを通し、戦間期に高等教育を受けた人びとの社会運動が、いかなる可能性と挫折を有していたのかを明らかにする。

機関誌や労働学校での講義といった新人会の読書実践から浮かび上がるのは、会員らの読書実践が社会的属性を超えた連帯の模索であったことである。会員らは読書を通じて、労働者や貧困層をとりまく劣悪な生活環境や労働状況を認識し、その中で生きる彼らもまた、同一の時代に生きる人々であることを自覚した。そして、読書を自らの社会的地位を強化する読み方と手段から、いわゆる社会的弱者を包摂する社会を改善するための手段へと展開した。その過程において彼らは、知識の送り手と受け手の立場が無限に交替するものを経験し、諸活動の遂行の中で自らが働きかけた現状に対し、応答する責任に気づいた。テキストを用いることで現状を「科学」的に解釈し、さらにその解釈を新たな共同性の「空想」へと発展させた新人会の読書実践は、自己に胚胎する受動性への気づきに支えられた活動であった。

キーワード：東京帝大新人会、読書実践、可能性と挫折

1 問題の所在

1.1 対象と問い

近年、1960年代の学生紛争の再検討が進んでいる（桂 2006；小熊 2009a, 2009b）。これらの研究は、学生たちの諸活動を、彼らの意味づけの水準で検討することで、現代の社会運動への否定的感情や若者たちのナショナリズム的傾向が1960年代の学生紛争に由来することを明らかにした。現代社会のさまざまな分野に影響を与えたこの時期の学生たちの活動は、大学の社会的機能を人々に問いかけたが、そうした学生たちからの問いの嚆矢として主題化されてきたのが、戦間期（1918-1939）の学生団体である「東京帝大新人会」（1919-1929、以下新人会）であ

* 筑波大学大学院人文社会科学研究所社会科学専攻 mgoto@social.tsukuba.ac.jp

る（思想の科学研究会編 1959; Smith 1972=1978）。

これらの研究は、新人会に言及する際、会員たちの諸活動を社会運動ととらえ、活動に内包された政治性に着目した。そして、彼らの活動を支えたマルクス主義をはじめとする各種の思想を中心に、第2次世界大戦前後の国家体制の連続性を論じている。いわば、一連の研究は、学生中心の知的エリートによる戦前と戦後の社会運動を断続してとらえるのではなく、通底する歴史的連続性という視座からその内実を分析している。そこでは、学生や知識人という知的エリートを中心にした戦前の社会運動が、戦中の国家体制に協力する道筋をつけた帰結として戦後の国家体制があること、最終的にそれらの運動が社会に開かれることなく学生たちの内部で完結した運動であったという問題が論じられてきた。

本稿で主題的に検討する新人会は、第2次世界大戦以前の学生運動において、最高の権威と最大の組織力をもった学生団体である。新人会は戦前の近代学校制度において頂点に位置づけられる東京帝国大学の在學生や卒業生を中心に、東京帝大教授で法学者の吉野作造（1878 1933）に傾倒した人びとが組織した活動団体であり、理論探求と実践活動の達成を目指して継続的に活動を行った団体であった。彼らは学内外での演説活動、機関紙の発行・運営や翻訳といった執筆活動、関東大震災を契機に発足されたセツルメント事業における医療活動、労働争議の応援や労働学校の運営まで、多岐にわたる活動を展開した。そして、それらを支えたのが読書実践であり、彼らの知識獲得と会員以外の人々への啓蒙、活動継続のためのリクルート手段には読書行為が不可欠であった。

新人会の読書活動は会員という枠に留まらず、社会活動の中でも行われている。彼らは会の草創期から機関誌や『帝国大学新聞』紙上を通して、テキストの翻訳紹介や読書リストを作成し、体系的な読書を提案した。また、会員たちは各種講演会や労働学校を運営して、時には社会的属性が異なる労働者などの他者とともに読書を行っている。そこでは、彼らの社会的属性である学生本業とは一見無縁のテキストが用いられたが、とりわけ彼らが熱心に取り組んだのが西洋思想の研究であり、その活動後期にはマルクス主義が主題的に検討された。後述するように、そうしたテキストの発見と研究は、学業のみからは生じえなかった新人会の活動の成果としてとらえられる。

本稿が着目したいのは、読書活動を通じて彼らが「科学から空想へ」という着想を得ていることである。それは、社会主義の啓蒙書として名高いF.エンゲルスの『空想から科学へ』を念頭においていることが一目でわかる。しかし、彼らはなぜF.エンゲルスとは逆の発想を得ることになったのだろうか。以下では彼らの読書に対する意味づけを検討することから、この発想の転換に内在する論理を明らかにする。

先述した新人会の諸活動を論じる研究は、学生団体である新人会の国家からの解散命令が、国家を相対化する機能を日本のアカデミズムから失う決定的な契機となったがゆえに、会員たちの諸活動を失敗と解釈してきた（思想の科学研究会編

1959; Smith 1972=1978). そして、高等教育享受者にとって読書が彼らに過剰なかたちでエリートとしての自負を与えた問題を指摘する一方で、読書行為の内在的な検討は行われてこなかった。だが、以下本稿を通してあきらかになるように、読書実践こそ、彼らの主要な活動である労働者とのかかわりの地盤形成を可能とした実践だったのである。新人会にとって読書実践とは、近代国家の形成を推し進める政府と資本主義経済の発展によって彼らを取り巻く状況が激変する中で、エリート／学生という社会的属性を超え、他者との間に新たな連帯を模索する契機をもたらしたものであった。

そこで本稿は、新人会の会員たちの読書活動に着目し、彼らが読書に対していかなる意味づけを行っていたのかを、会員たちの当時の論考や機関誌、回想録から明らかにする。

1.2 分析視角——社会運動としての読書

戦前の高等教育機関の学生たちの読書行為については、すでにさまざまなかたちで研究が蓄積されている。近代学校制度における学生研究の先駆者である竹内洋は、この時期の学生たちは人文学を中心にした書物を読むことで人格の完成を目指したと論ずる。そして彼らが信奉したマルクス主義は、近代以降の高等教育機関が西洋の学術知を遵法する風潮があったがゆえ普及したのであり、学生たちの読書行為は一貫して自らを近代学校制度の内部において学生たらしめる手段であったという(竹内 2003: 40, 50)。他にも、読書史研究者の永嶺重敏は、戦前の帝大生の読書実践が、進級や就職への準備に傾倒していたこと、また大学図書館や古本で求めた教授たちの著作や講義録の暗記が、盲目的に行われたことを明らかにしている¹⁾(永嶺 2007)。

学生の読書行為に関するこれらの研究は、戦前から今日までの長期にわたる近代学校制度の平均的な読者像を提示し、さらに学生たちの読書が、テキストの暗記と人格の完成を通じて近代学校制度の内部に彼らを位置づける行為であることを明らかにした。それゆえ、既存研究によると、この時期に学生たちが熱心にマルクス主義の文献を読んだことも、そうした教養主義的利益の達成手段の1つだったのであり、そこで行われている読書とは、決してテキストに書かれた内容を生活する現実の状況に当てはめてとらえていこうとするものではなかったという(竹内 2003; 永嶺 2001)。

本稿は知見の多くをこれらの先行研究においつつも、労働者とともにテキストを読むことを推進しようとした新人会の活動に着目することで、その読書実践が社会的属性を超えて他者との連帯を模索するという、これまで十分に主題化されてきたとは言い難い読書行為の存在を検証する。「科学から空想へ」という逆転の発想にいたる新人会の試行錯誤の過程からは、新人会にとって読書が、諸活動を通して接した社会に対し、責任を負うことを彼らに自覚させていく実践だったことが明らかになる。

読書行為と思考法の結節を理解するうえで、佐藤健二による議論は、重要な導きの糸となる（佐藤 1987）。佐藤は柳田国男（1875-1962）の著作に着目して、テキストに残された引用や索引を取り上げながら、テキストというメディアを読むことが柳田の「知の形式」と本質的にかかわっていることを指摘した。佐藤によれば、テキストそれ自体はさまざまな知識の集積であり、読書行為ではそうした集積全体を作り上げた力を読むという方法を人びとに産出させる。そのため、テキストというメディアは一方で権威生産の手段でありつつ、他方で歴史への関心を広げ、さらに人びとが比較や批判という新たな思考法を手に入れることを可能にする。とりわけ示唆的なのが、犯罪調書というテキストを読む経験から柳田が、国家の規範とは異なる、生活者の規範が存在するという視点を得たこと、そしてそうした人びとの生活をまた柳田が別の論考にまとめ、書き残して読者に伝えたことである。すなわち、佐藤は読書行為が読者のこれまでの経験を拡張させ、思考を洗練化させていくことを指摘した（佐藤 1987: 125）。

新人会の読書実践にもこの読書と「知の形式」の連関があるのではないだろうか。具体的に敷衍すれば、会員たちの読書は、経験を拡張させる読書という特性から、テキストをいかに読むかをめぐる彼らの思考のあり様まで、その活動の内実を大きく規定してきた実践であった。その過程において、会員たちはテキストを介して読者と執筆者・編集者の重層的な交感を経験し、自らの立場の可変性を認識していく。そうした会員たちの読書実践は、竹内らが述べるような読書行為の意味づけとは異なる位相を提示し、これまで十分に主題化されてきたとは言い難い会員たちの活動の可能性を提示する。そしてそこからは、後に会員たちが「発展的解消」を宣言して同会を解散するにいたる活動の挫折をめぐる萌芽をも浮き彫りになるだろう。

本稿は以下でまず、戦間期において学生が置かれた社会的地位と読書の関係を確認する（第2節）。つぎに会員たちの読書実践の形態に着目し、その意味を考察する。そこでまず、彼らの読書実践が、帝大生という社会的属性に安住する読書だけではなく、社会的属性を超えた読者の共同性を志向する新しい読書の萌芽があったことを提示する（第3節）。とりわけ、そうした新人会の読書実践は、激変する状況の中で、テキストを読むことで得た知識を、労働者に接することで感得した状況とすり合わせ、現状を解釈、改善するための方途へ展開したこと、その過程で、会員たちが活動継続のために受動的側面の重要性を自覚したことを指摘する（第4節）。新人会は、テキストを基点に、テキストと社会を結びつける運動として読書実践をとらえ、遂行してきたが、そこからは、戦間期にさまざまな試行錯誤を行ってきた高等教育享受者である新人会員たちが行った社会運動の可能性と限界が明らかになる。

2 戦間期の学生を取り巻く環境

新人会の読書実践を検討するに当たって、まず彼らの社会的地位を基点に当時の

帝大生がおかれた状況を確認したい。なぜならその状況こそが、彼らの読書実践を支える文脈であるからだ。

帝大生という社会的属性を理解するには、まず日本の近代学校制度を参照しなければならない。日本の近代学校制度の整備は1872年の学制の発布を基点に、順次、整備されていった。中でも1887年発布の帝国大学令第1条と帝大生に対する試験の優遇を記した官僚任官試験に関する法制度は、国家を運営する官僚の予備軍として帝大生に高い社会的地位を与えた。大学進学率が10パーセントに満たず、旧制中学進学率も低い当時、学生となること自体が少数の人びとに与えられた特権だったが、さらに帝大生となることは国家を担う人物としてより高い期待が込められていた。だが、帝大生が特権的に見られた時代は長くは続かない。1908年の大学令の改正以後、専門学校として帝国大学よりランクが下だと見なされた私立学校の大学化への要求が認められ大学の大衆化が進んだことや、第1次世界大戦による戦時好景気が終了し、社会全体が就職難に陥ったことによって、以前の世代よりは帝大生の社会的地位は低下した。事実、この時期に会員たちはこぞって就職難であることをさまざまな媒体に吐露している。会員の1人であり、のちのジャーナリスト大宅壮一（1900-1970）は当時、その名も「就職難と知識階級の高速度的没落」という論考を執筆している（大宅1929）。

他方で、明治維新から50年経ったこの1920年代は、度重なる戦争で戦勝国になる幸運もあいまって、資本主義経済が発達し、都市部ではモボやモガ、銀ブラといった現象が現れた、いわば消費を楽しむ中産階層が誕生した時代でもあった。それは、衣食住が充足され最低限の生活を越えた楽しみが多くの人びとに生じたことを表しており、高等教育機関の多くが都市部に置かれたこともあって、カフェめぐりや学校対抗試合、学内同人誌の発行や学内自治組織の発達といった学生固有の文化が育まれた時期でもあった。

だがこの1920年代を通して、労働者や都市下層民の労働条件や貧困が社会問題として認識されるようになり、人びとの権利意識が高まる中、そうした変化に対する見解表明が社会的属性を問わず行われるようになっていく（南編1965）。

新聞や総合雑誌はこうした状況を伝えるメディアとして機能し、帝大教授陣を主要な論客に据えた総合雑誌『中央公論』は、新中間層とその予備軍である大学生に多く読まれた（永嶺1997）。さらに、高等教育享受者の間では京都帝大教授を務めていた河上肇（1879-1946）による貧困状況の紹介とその発生原因の分析・解決法を提案した『貧乏物語』がよく読まれた。そうした見解は都市と地方とを問わず開かれた演説会で伝えられ、高等教育機関の弁論部に所属する一部の学生もテーマに組み込み論じられた²⁾。他にも、同時期、労働者の権利擁護を目的にした友愛会（1912-1921）が東京帝大出身である鈴木文治（1885-1946）によって作られるなど、高等教育機関の出身者が社会状況に関心を寄せはじめていた。

しかしながら、前述したように、当時の多くの学生にとって読書とは人格完成の手段であり、現実社会とは無縁のものにとらえられていた。事実、帝大生は卒業や

就職に関わる試験に追われ、将来に不安を抱えていたとはいえ、彼らと同時代の社会状況に不安や不満を抱えた人びとの問題に、新聞や雑誌を通して間接的なかたちで接していたものの、積極的に関心をもち接近したとはいえない。言い換えれば、帝大生たちはテキストを通して社会問題に触れてはいても、直接に現実社会の中で起こる問題に向き合っていたとはなかった。

3 教養としての読書

では、会員たちは読書をどのように意味づけていたのだろうか。新人会では一見すると形態の異なる2つの読書が行われていた。

1つは、1人で多読する形態である。たとえば、会員の1人で後の社会学者になる新明正道（1889-1984）は、若かりし日を回想した文章の中で次のように記している。

当時は誰でも青年期にはそうであったように私も学問的好奇心が強くまた読書力もすこぶる旺盛だったもので、たしか1年生のとき私は九州の小倉のある知り合いの家へ行って一夏を過ごしたが、携えていった書物を忽ち読みつくしてしまったので、ある日古本屋に行くとドストエフスキーの『罪と罰』の英訳を買ってこれをよむことにしたが、字引も引かないで私はともかくこれを強引に読み通して、一通りラスコルニコフの煩悶をわれなりに了解しえた気持ちになっていたものであった。こうした流儀で私はその後県立図書館に通って一週間ぐらいかけて森鷗外訳のゲーテの『ファウスト』をやみくもに読了したが、それに続いて私はさらにトルストイの『戦争と平和』にとりかかり、これもかなりの日数をかけたものの、その大筋をよみ終わるとともに、その尻尾に彼が展開した戦争と平和の歴史を通じて彼独自の見解にも少なからぬ興味をそそられた。（新明 [1981]1984: 300）

新明の回想からは、「携えて行った書物を忽ちに読みつく」したとあるように、その旺盛な読書欲が示されている。加えて、テキストの登場人物や著者の世界観に目を向けながらも、「強引に」や「やみくもに」読み進めるという読書が示すように、内容の理解よりも1人で多読することにこそ意義があると理解されていた。

だが、同時に1人で多読するという読書の形式は、彼のみの経験でもなかった。戦間期には古本屋や図書館など多様な書物の流通経路がすでに存在しており、それは読む者がその書物を手にした瞬間、現在その書物を手にしている自分だけではなく、過去にその書物を読んだ者、あるいは未来にその書物を読むであろう者といった、見えない読者と対峙することを意味した。読書はその行為を介して読者共同体へと参入する志向を内包しており、1人で多読する背後には、競い合って読む自らと同質の読者が想定されていたのである。

このように、この当時の学生にとって、読書は孤独に、もしくは見えない読者を想定しながら1人で行う行為であるとともに、集団で行う行為でもあった。その特徴は、以下で確認するように、「皮膚から雰囲気を呼吸」という、テキストを文字以外の回路から理解する方法の存在であった。それは理解や解釈不可能な点を補い、新しい解釈へテキスト理解を深める利点が見込まれていた。

そればかりか、新明の次の回想にあるように、読書からは同様の関心をもった共同体形成の志向性がうかがわれる。

東京大学に入ってからその当初吉野作造博士……からの影響だけによって、自分の平和主義への志向を決定していたわけではなく、少なくとも私は大正8年9月から当時目近くの高田村の新人会本部に入りさらに積極的に会の学内の学外的活動に参加するようになってからは、民主主義だけではなく、広く一般的に社会主義をも研究しなければならなくなってきた。（新明 [1981]1984: 304, 下線部引用者）

この新明の回想からは、新しい知識を得、自身の関心を広げることが共同生活の効用として理解されていたこと、またテキストを通して切磋琢磨するような共同体が存在していたことが推察できる。この共同体を可能にしたのが、新明によって「新人会本部」と記され、彼らに「合宿所」³⁾と呼ばれた空間であった。そこで、彼らはどのようにテキストと向き合ったのだろうか。それを考えるうえで非常に示唆的であるのが、共同生活を新明と同時期に送り、後に経済学者となる会員の林要（1894 1991）の下記の言葉である。林は後年、当時のことを振り返る中で、集団生活を通じてかつて自らが社会思想を言語で形作られる「理論の形」ではなく「皮膚から」吸収したと綴っている。

そのころ、私たちは文字や講義で知識を啓発される手段にはめぐまれていなかったのである。その代り、体全体が目や耳の代りをした。すべてを体で感じ取った。……生活が共同であったから、気分的な一致がたやすく生まれて、理論的な穿さく討議ということは、おざなりに流れがちであった。喧嘩裡にあっても新明君などは、ぶあつな本を平気で読みながら、ひとの冗談はなしや毒舌の応酬にもチョイチョイ口を入れていたが、私はむつかしい読書どころか、新聞もおちついて読めなかった。だから、社会思想なども私には理論の形で頭に入るよりも、むしろ、皮膚から雰囲気を呼吸した形であった。（林 194: 163 171, 下線部引用者）

以上、読書の形態が異なるものの、1人で多読する、あるいは複数の仲間と共同で読書するこれら2つの形式は、高等教育を享受した者のみが経験できる点で共通しており、従来のエリートたちが行ってきた教養のための読書と同型であるといえ

よう。

だが、彼らが行ってきた読書行為の意味合いはそうした側面だけに還元されるものではなかった。なぜなら、1つは、読者の共同体はテキストを手にとった瞬間から有形無形にたち現れるものであったからである。そしていま1つは、後述するように、林が語っている読書に関する「皮膚から」の理解という言葉は、彼らが日常生活の中で自らの身体を通して感得した社会事情を考慮に入れながら、テキストと向かい合わなければならないという意思表示であったと理解することができるからである。後述するように、彼らの活動は読書だけではなく、労働者街の月島や柳島に居住することや労働争議の応援などの社会問題に「皮膚」を通して触れることを含んでおり、社会を意識した読書実践への萌芽がかいま見られるのである。次節で検討するが、彼らはある創造的な読書の形態を遂行していくことになる。

4 共同性を模索する新人会の読書実践

——『『空想』から『科学』へ』から「科学から空想へ」という逆転

4.1 読書の意味づけの変化

会員たちはまた、帝大生であったからこそある1つの読み方を習得する必要があった。彼らの帝大入学の動機はさまざまに語られるが、それらに多く共通しているのは「官僚になれ」との父親からの助言である⁴⁾。彼らはその期待にこたえるため、官僚を目指して勉学することが求められた。それは大学図書館などに通い、教授たちの講義録や指定教科書の暗記をはじめとして、読書は立身出世のための手段であり、多くの帝大生と変りはなかった。そこからは、当時の帝大生たちにテキスト内部で学んだことはテキスト内部で完結すること、アカデミズムの枠内で収めることが求められていたことが確認できる。

だが、新人会の内部では次第にこうした読書に対して疑義が提起された⁵⁾。新明と同時期に活動した会員で後の法学者風早八十二（1899-1989）は、機関誌上でマルクス主義をより踏み込んで考察すべきだと主張している。下記の引用は、当時の激変する社会状況の中で彼らにとって読書という行為の意味が大きく変更されつつあったことを示唆している。

いかにも、マルクスは科学的たらんとして、空想的であった。そこだそこが面白いのだ。我々は、マルクスの学説にはばかり目をくれて、科学的と云うことにばかり捉われて、肝心のマルクスと云う人間そのものを見逃してはならぬ。スチームの通っている暖い研究室が、平安無事に書き物を漁ってる者共の智識でなくして追放の処刑の為に転々として席の暖まる暇もなく、廃所の月に、自ら燃に出た真情なのである……。××〔伏字、革命：引用者〕にとって、大切なことは、学問科学ではなくしてこの熱情である。この熱情を起こさせるに至る社会事情である。（風早 1922、下線部引用者）

この文面からは、まずK.マルクスの読み方そのものの変更が必要だと認識されていたこと、読書の意味づけを変更することで、彼らが社会とどのようにかかわっていくのかという新人会の活動の目的の新たな方法を模索していた様子が推察できる。

そして重要であるのが、風早が掲げたともすると不自然に見える「科学から空想へ」という発想である。マルクスと共著の多いF.エンゲルスは、社会主義の初心者向けパンフレットとして『空想から科学へ』を出版していた(Engels 1883 = 1946)。風早はそのタイトルをもじり、「科学から空想へ」という方向が、自分たちの活動にとって重要であると主張している。

風早はこうした読み方を求めた理由を同論考冒頭で「学問とは何か、実証とは何か。それは身共の如き暇人が、物好きに任せて研究室で、コツコツと、世界中の新聞や著書や判例などから材料を集めて、之を切り盛り算段して結論を導き出す手品である。そうして、今の所では斯うして得られた智識に対しては何人も出来なくなっている」と述べ、「それは要するに、学者暇人の理屈と云うもので、今現に、この資本主義組織の下に苦しめられている者にとっては、現実のその苦痛から逃げると云うことのみが問題なのだ」(風早 1922)と訴える。つまり、彼は研究室で铸造する学問が「苦しめられている者」たちの現実とは大きく乖離していることを批判していた。

以上の風早の訴えを考えるうえで、彼らが生きていた戦間期という時期は決定的な意味をもっている。それは、日露戦争による経済の好不況を経験し、戦争成金が生まれる一方で、労働事情や都市の貧困層が社会問題として認識されはじめた当時の日本社会であった⁶⁾。

前述の林は、この時期から会の活動が具体的なものへと変化したことを記録する。たとえば、会独自の機関誌の発行がはじまり⁷⁾、大学内外での講演会を彼らは開催するなど、より広範なかたちで学外の学生との連帯を模索しはじめる。会員らは1920年5月のメーデーで出会った亀戸のセルロイド工に助力を請われ労働組合の組織化に協力し、月島などの労働者が多く住む東京市下の地域へ電車で出かけ、座談会や研究会に参加する。あるいは1919年から内務省や新聞社主催の貧困や失業調査に参加した⁸⁾。このとき内務省の衛生調査に同行した会員の1人⁹⁾は報告書の中で「然し之よりも貧弱なる献立をせねばならぬような時が永遠に來ぬことを自分は希望してこの筆を擱くことにしよう」(内務省衛生局編 [1921]1970: 203)と記録している。

さらに、彼らは前述の活動を通して知った社会問題の諸状況に対して、労働争議の応援演説への参加や、問題解決手段として社会主義を機関誌上において紹介、あるいは社会主義に関する翻訳を多く掲載している。つまり、彼らは現状を把握し、文字や実際の活動をとおして現状の改善を試みるとともに、読書を通して自らが学んでいる教室の外側にある社会を見つけ、教室の中で学んだ知識を教室外の現状に応用しようと模索していたのである。

ひるがえって、彼らの読書実践に戻れば、こうした問題意識をもっていたからこそ、会員たちはそれまで標準とされてきた読書とは異なる読書を模索せざるをえなかったといえるだろう。目の前に広がる問題に満ちた現状をよりよいものとして改良することが志向されたがゆえに、新たな社会秩序の構成を模索するための読書が彼らには必要だと認識されていた。だからこそ、これまでのエリート養成のための読書を否定する読書が求められたのであり、「科学から空想へ」というテキストを相対化するアクロバティックな読みの転換が模索されたのではないだろうか。

このように、会員たちはテキストと実際の社会問題をすり合わせようと試みた。以下で見ると、機関誌や労働学校の講義はその具体的な方法だった。とりわけ、機関誌には読むことと書くことの2つの行為が含まれていたが、次項ではこの機関紙の運営・発行をさらに内在的に検討したい。

4.2 読書を媒介にした共同性の模索

ここまで学生たちの読書に焦点を当ててきたが、読書とは何も学生のみに限られた行為ではなく、戦間期は新聞や講談雑誌などを愛読する労働階級の読者が拡大した。彼らは経済的理由から古本や図書館を利用していたが、熱心に書物を求め、時には『中央公論』といった知識エリートを主な読者層とした総合雑誌も読んだ。

他方でこの時期、労働者から学生まで多岐にわたる読者の間には、読書力の格差と読書内容の差異が顕在化していきつつあった。たとえば、新人会員たちが熱心に社会科学の専門文献を講読する一方で、大多数の読者はもっぱら読書に娯楽性を求めている。また、同一のテキストが読まれていた場合でも、社会的属性によって読み方はまったく異なった（永嶺 2001: 197）。つまり、テキストは社会的属性によって分断されると同時に、今ある社会的属性を再生産する機能をもっていたのである。

だが、興味深いのは前記に当てはまらない例として、機関誌を通してエリート集団である新人会に接した労働者の存在がある。そうした読者たちに、読書とはどのように意味づけられていたのだろうか。

新人会機関誌に掲載された次の2つの読者投稿は、一見すると機関誌を希求する地方在住の労働者が、テキスト読解を助けてくれる解釈者もなく読む姿を示している。けれども、会員たちが機関誌でたびたび論じた労働条件の改善やその手段として団結するといった主張を、読者が自家薬籠中の物にしている姿も示される。そこからは、読者にとって新人会のテキスト受容は、自らが置かれた状況を概観し、行動指針を立てるといった、現状に対応する糧を得る手段であったことが推察できる。

東京の同志から「同胞」を毎号送ってもらって毎号読んでおります。……私共はブルジョアジイと闘わなければならぬと同時にこれを擁護する中間階級とも亦労働者を食い物にする労働ブローカー的人間とも徹底的に戦わなければなりません。我々プロレタリアートの大理想は、地位や名誉や金や権力ぢやあ

りません。真実のデモクラシーの社会の実現のために、起る圧迫、迫害にも打ち勝って最後まで勇ましく戦わねばなりません。毎日11時間の工場勤めのものでありますから思う程にはまいりませんか知りませんがこの眠っている中京思想界を覚醒させたいと思います。名古屋市一篠田音一君（「同土通信」新人会機関誌『同胞』(7)）。

圧迫に次ぐ圧迫で出来上がるかどうか心配していた矢先御送本で歓喜しました。早速読後観を送り度いと思います。昨日は配達夫の群れに宣伝しました。明日は沖仲仕〔ママ 沖仲仕：引用者〕の海に飛び込んで話さうと思つてゐます。（小樽支部）（「同志談林」『同胞』(2)）。

興味深いのは、機関誌をほかの読者に「話」し、「宣伝」する中で労働者たち読者におこる変化である。先の投稿では、長時間工場で働く労働者である読者が、自分たちを苦しめる「労働ブローカー」と戦うことが記されている。その構成は会員たちが機関誌で使う論調とよく似ている。会員たちによって選定された欧文の翻訳紹介やそれらをまとめた論考には、労働条件の改善やそのための団結がうたわれていた。あわせてそれらを援用しながら罷業や解雇に関する労働争議の状況が説明された¹⁰⁾。表面的な字面をなぞれば、労働者の投稿内容は会員の言葉の受け売りであり、「宣伝」とはまさに会員たちの主張を伝えることだったと考えられる。

だが、実際に彼らが論調を模倣するとき、自らの状況に転用して主張を作り上げていたことに着目したい。読者は「毎日11時間の工場勤め」の中で、自分たちを「食べ物にする」人びとと「闘わなければならぬ」と訴える。そして、こうした現状を知らない「思想界を覚醒させ」る決意を会員たちに宣言する。この模倣の過程において、読者である労働者は会員たちの言葉を自らの文脈で了解し、問題状況を言語化し、現状に対処する術を発見するための資源として活用していたことが明らかになる。会員たちの言葉は労働者に活動の端緒を与え、遂行する、いわばガイドブックに類した機能を果たしていた。このように、「宣伝」とは文字どおり主張を広く知らせることを意味するだけではなく、彼らの行動を規定し、そのために思考を精練させることでもあったと理解できる。

このことを会員側から照射すると、機関誌に社会的属性を超えたあらたな関係性の創出が意図されていたことが浮かび上がる。そして、以下で見るように、その過程で生じた執筆者・編集者の役割の一時的な逆転こそが、労働者とともに読むことを彼らに可能としたのである。

前述した2つの読者投稿からは、読書を媒介に関係が増出された様子がうかがえる。「東京の同志」から「名古屋」へ、1人の読者から配達夫や沖仲仕へ、と都市や職業を超えて、読者の共同体が形成されている。そもそも、会員たちが発行・運営した機関誌は1部10銭から20銭で東京市内の書店をはじめ、地方の大書店で取り扱われた。雑誌の頒布方法は、一般の雑誌同様、広範な地域での新規読者の開拓

が望まれていたことを示しており、投稿者が記す都市名や流通方法からは、会員たちの意図に合致した読者の姿が現れる。

さらに投稿欄という位置づけに着目すれば、そこからは会員たちが労働者たち読者との間にある社会的属性に縛られた関係を誌面という限定された空間において保留しようと試みていたことが読み取れる。読者投稿欄は、新人会独自の機関誌『デモクラシイ』の創刊第2号から、廃刊するまで続けられ、読者による読後感や彼らの近況がづづられ、ときには原稿用紙20枚におよぶ論考も送られていた。

読者からの送られた論考や記事を会員たちは当初、必ずしも各号、読者投稿欄に独立した小見出しをつけず、会員の近況報告と同一誌面上にランダムに配置した。読者投稿欄も後期になると小見出しを設け、そこで「同志」「交響」といった呼びかけ、一体感を演出する語を用いた¹¹⁾。会員たちは、誌面上において立場を曖昧にすることで、擬似的な平等空間を創出しようとした。それは会員たちの一時的な演出にすぎない可能性もあるが、投稿欄に「同志」といった語を冠されることで、労働者たち読者は、現実の世界では接することの少なく、将来支配層になる可能性を有する帝大生に向かって、現状を伝え、状況の改善方法を考えさせる契機を獲得する。

こうした会員たちの投稿欄の扱い方からは、会員たちが投稿者と自らに差異を設けようとしたのではなく、テキストの送り手と受け手といった関係がもち込んでしまう支配関係を解消し、会員と労働者たち読者のフラットな関係を模索していたことがうかがえる。誌面上という限定された空間ではあるが、投稿欄は、会員たちが機関誌を通じて社会的属性を超えた新たな関係を創出しようとした試みであり、新人会の読書実践の1つの可能性を示している。しかし次項で見るように、彼らの読書実践には、その実践が内包せざるをえなかった問題が存在していた。

4.3 読書実践の意図せざる結果

度重なる発禁処分によって機関誌を廃刊した新人会は、その後、労働学校の運営に乗り出し、より直接的に労働者とともに読書する機会を得る。だが、会員たちが積極的に運営に関与したつぎの労働学校の回想からは、新人会の読書実践が労働者にとって決して容易ではなかったことが推察される。

生徒はほとんど小学校を出ただけであり、服部之総（1901-1956、会員）さんの「日本社会史」などは目を輝かせて聞くが、経済学などになると、どうしても居眠りが目につく。生徒に人気があった講義の1つは曾田長宗（1899-1935、会員）さんの「労働衛生」であった。それでも生徒はなかなか質問しないので、顔色で判断するしかない。（彦坂 1984: 132-3）

労働学校は1923年の関東大震災を契機に設立された、東京帝大セツルメント（以下セツルメント）事業の一環で運営された学校である。その活動には、「知識の

独占者」から「知識の分与」を目的に、帝大生による「手と足の運動」の標語を具体化することが期待された¹²⁾。会員たちはレジデントやセツラーとしてセツルメント事業に従事したが、その労働学校で会員たちはチューターや講師となって、労働者とともにテキストを読んだ。

チューターシステムは労働学校草創期から導入され、自身もチューターであった前述の彦坂（1905-1985）は、同論考でそれが特異な役割を担ったと回想する。彼によれば、チューターは、講義の前に出欠をとり、講師や前回の内容を紹介するなど「級長兼司会」の仕事を負い、講師が欠席した場合は代講する役目を負った。さらに、講義で労働者に理解困難な箇所があると判断した場合、講師に質問を投げかけ、例示の要求などを行った。その立場はさながら「壇下の講師、生徒の代弁者」であったと記憶される。

労働学校のプログラムは、1学期を3ヵ月で修了するよう組まれ、労働法制、農村法律問題、経済学などの講義が開設され、講師が選出したテキストの輪読やガリ版のプリントによって講義が進められた。本所深川のセツルメントには、毎日仕事を終えた和服姿の労働者が集まり、チューターは労働者とともに、若手帝大教授や新人会出身の講壇の講師の講義に耳を傾けた。

しかしながら、受講生たちは面接試験を受け、授業料を納付して入学したにもかかわらず、居眠りをするものが少なくなかったという。いかに向学心や興味をもっていても、就業後、18時半から3時間の講義を聴講することは受講生にとって容易なものではなかったのである。受講生は自分たちの生活と関連する労働衛生といった実学要素の強いものや講師の解釈によってオリジナルな視点が提示されるものに惹きつけられたが、その活動内容の少なくない部分で、会員たちと受講生の間にはすれ違いが生じていた。そして、講師の欠勤や受講生の残業などもあり、労働学校は次第に継続が危ぶまれていった。

こうした状況に、会員たちはカリキュラムの変更をもって対応した。たとえば、専門的な学術講義によって構成された講義だけではなく、「労働者に必要な常識教育」を目的に中学校過程に該当する内容をもつ中等科を設置し、また、残業から定期的に通学できない者のために受講資格を問わない市民講座を開設した。セツルメントの責任者だった会員はこれらの変更にいたる経緯について、「若し我々が労働街に臨むならば、労働者の生活とそれを基礎とした人生や社会を説明する学問を用意しなければならない」と述べ、それが十分準備できなかったため、労働学校の運営が「失敗に終わった」と記している（内村 1925）。「個々人の知識に対する遊戯的好奇心」を求めた当初のプログラムが、「労働者に必要な常識教育」とは異なっていたと述べる会員の記述からは、労働者とともに読書することで、会員たちの自己認識に看過できない変化が起きていることが指摘できる。このことは、彼らの読書実践を社会運動としてとらえようとするとき、重要な視点を提供する。

ここで、情報の受け手と送り手として、新人会と労働者の関係をとらえてみると、活動を遂行する中で、会員たちと労働者の関係が流動化していることが確認できる。

たとえば、機関誌上で会員たちは、会員は執筆者・編集者、労働者は読者と指定し、読者は執筆者・編集者の見解を無条件に受容する存在として認識されていた。あるいは、労働学校においては、労働者に「知識に対する遊戯的好奇心」があることを前提にカリキュラムが組まれていた。そして、その中には彼らに対する「指導」という言葉が頻繁に用いられていたように、受け手である労働者の受動性が一方的に指定されており、その能動性は捨象されている。だが、労働者が会員たちの眼前に実態をもって現れたとき、労働者は機関誌上で自身の見解を述べることにはじまり、労働学校の居眠りを通して、会員らに変化をうながしていく。たとえば、先に見た労働学校におけるカリキュラムの変更などの試行錯誤は、これまで執筆者や編集者として一方的にふるまってきた新人会員たちが、それまでの指導者といった立場の正当性を問い直していこうとした営為としても理解することができないだろうか。

これまで見てきたように、会員たちはその活動における読書実践から、現状を分析する視角や対峙する方法を学んできた。そして、機関誌の発行や労働学校での講義を通して、社会的属性の異なる労働者たちとともに読書することを試みてきた。佐藤健二は柳田国男の読書行為を検討する中で、読書には読者の経験を拡張し、思考を洗練させていく側面があることを指摘している（佐藤 1987）。この視点を踏まえると、それまでの読書経験を通してテキストの知を現実社会へと折り込んでいくことが現状の改善の方途である可能性を学んだがゆえに、労働者という他者と机をともにしながらテキストを読もうとする新人会の試みもまた、読書行為の意味を社会的属性の安定化を企図するものから、属性を超えた共同性を模索する、一種の社会運動へと展開させた実践として理解することができる。

さらに、会員たちの読書実践からは、そこに内包された斬新な実践性が見えてくる。これまで確認してきたように、読者投稿欄や労働学校での講義で会員たちは、労働者たち他者の声を聞き、指導者から指導される者への自らの立場の変更こそ、活動の遂行に必要なだと気づいた。このことは、先に触れた風早の「科学から空想へ」という標語と重なっているだろう。自分たちの生きる社会がどのような問題を抱えているのか要因を分析し、さらに変革を目指す会員たちの「科学」的な試みは、彼らが高等教育を受けたからこそ得られたものであり、特権的な立場が内包されていた。だが、彼らが直面した居眠りや労働者の声は、会員らに学術的な知ではとらえきれない現状があり、前提する知識や彼らの立場それ自体を疑う必要があることに気づかせる。すなわち、会員らの読書を通して社会的属性を超えた社会を「空想」する試みは、他者とともに社会を変えていく主体として自らをとらえる「空想」でもあった。

以上で見てきたように、会員たちは、読書実践を通して状況変革を試みた社会に対して、応答責任を負うことが必要だと認識した。それはまさに、第3の読書実践という空想の意図せざる結果であった。

5 終わりに

最後に、新人会のその後を含めて活動を確認したい。そこからは、戦間期に高等教育を受けた学生たちによる社会運動がもつ可能性と挫折があらためて確認できる。

新人会は治安維持法が適用され、会員から検挙者を出した1925年の学連事件を皮切りに、大学と国家から活動を制限され、活動の弾圧が続く1929年、「発展的解消」を宣言し、解散する。少なくない会員たちが、合法、非合法の政治団体に参加し、個人単位で活動を継続させた。だが、彼らが活動を通じて築いてきた学閥や地縁にもとづく組織力、豊富な時間をもたらす濫読によって得られた独自の発想は、法の名のもと制限される。

そうした結末を踏まえ、これまで、彼らの読書実践は、労働者や都市貧困層の日々の営みを無視した西洋知識の無批判な応用であったと論じられてきた。彼らの活動は、政治的な対抗文化、言い換えれば権力を駆使する国家を相対化する視点を得られたにもかかわらず、十分に機能しなかった（思想の科学研究会編 1959; Smith, 1972=1978）。

本稿は、新人会の読書実践をより詳細に考察することで、時代状況と向き合う中で彼らが模索してきた読書実践を検討してきた。「皮膚からの」理解方法を感得した林は、新人会員となることで「今まで条文を動しがたい真理として受け取り、これを現実の社会と対決させることもなく棒暗記していた自分が、いまは不思議でならなかった。『貧乏物語』の目で見直すと、世の中はまるで逆に見えるようになった」と回想する（林 1947: 156）。読書の新しい形態を発見した林の素朴な驚きは、読書行為がもつ可能性を示唆しているのではないだろうか。

本稿が明らかにしてきたように、新人会の読書実践は、読書を通じて社会的属性を相互に留保させ、新たな共同性を模索する社会運動であった。そこでは、テキストに書かれたことを現状の社会問題に当てはめようとする、テキストの相対化が試みられていた。とりわけ、この過程において彼らが経験した立場の逆転は重要である。会員たちはテキストにつねに能動的に接してきたが、読者からの返答を、再度、読書行為にもち込んだとき、自己の内部に胚胎する受動性に気づく。それゆえに、彼らは劣悪な生活条件や労働条件の中で生きる人びともまた、彼らと同じ時代に生きる人びとであることを発見し、テキストと読書の関係を、自らの社会的地位を安定させるという固定的な読み方とそのため的手段から、そうした人びとを包摂する社会改善を目指すための手段へと展開したと考えられる。こうした、アカデミズムの知を現状へと応用させることを読書行為の目的として見出した彼らの読書実践は、第3の読書実践ともいえる、読書の意図せざる成果であった。

むろん、本稿が見出した読書行為の可能性は、戦間期の学生運動に対する1つの解釈に過ぎない。会員たちが迎えた結末は、会員たちの読書実践が、その後、彼らの諸活動に反映されたと思われていない。だが、このことは、すでに評価が下され

た歴史的な出来事が、彼らの活動を内在的に論じることでしか明らかにできない問題であることを示しているのではないだろうか。たとえば、後に作家になる中野重治（1902-1979）は、後年、小説『むらぎも』（中野 1954）を執筆し、新人会と労働争議団との間にある確執を描いた。戦後10年を経て書かれた中野の「自伝的小説」は、新人会がむかえたその後を、どのように彼ら自身が解釈し、その解釈を再びテキストのかたちで人びとに問う、彼らの軌跡を表す作品ととらえられる。それは、新人会の読書実践の可能性と挫折が、その後の経過を踏まえて評価しなければならないことを意味している。こうした視点に立つことは、文化の成熟と権利意識が高まった大正デモクラシーの中で培われた自己への受動性の気づきと連帯への意識を、その後が続く戦時下体制に、どのように継承／断絶したのかを問いなおす作業へとつながるはずだ。今後の課題としたい。

【注】

- 1) その特徴は無味乾燥的な専門的読書が行われていたこと、アクセスの窓口が大学図書館、古本屋であり必ずしも新刊本を購入しただけではなかったこと、そして共同で行われる読書である（永嶺 2007: 54-60, 272）。
- 2) 1900年代初頭は学生の「第2次弁論ブーム」であり、新人会はその最後尾を占め、社会問題を論じる方向へと誘導した（井上 1999）。新人会と演説の関係は深く、帝大弁論部顧問の吉野作造が政治結社黒龍会と行った立会演説会が会創設の機会であった（赤松編 [1934]1999）。
- 3) 会員たちは経済的な負担の軽減と、想定する会員像を身体化するために共同生活を営んだ（後藤 2010）。
- 4) 林、新明ともに、父親の助言によると回想する（林 1947; 新明 [1981]1984）。
- 5) たとえば、後に政治学者となる蠟山政道（1895-1980）は「新しく得た1つの喜び」と題し、大学で教授される知識が現状の解釈には適していないことを糾弾した（蠟山 1919）。また、後に弁護士で社会社会党に属した三輪寿壮（1894-1956）は「虫眼鏡」と題し、学生たちの利己的な精神は大学教育の機械式詰め込み教育に起因する、と大学教育を批判した（三輪 1919）。
- 6) たとえば、横山源之助 [1899]1985『日本之下層社会』など、1918年には、内務省が労働者の実態調査を月島地区で行った。
- 7) 機関誌は1919年に創刊された『デモクラシイ』から1922年に廃刊する『ナロード』まで、途中タイトルを『先駆』『同胞』と変えながら続けられた。いずれも、法政大学大原社会問題研究所編（1969）に収録されている。
- 8) 注⑥でも触れた「月島調査」に、会員たちは月島に調査員として居住し参加した。他にも、東京日日新聞主催の東京、関西、信州を対象にした失業調査に参加した。
- 9) 山名義鶴（1891-1964）。他の調査員が実態の計量的記述に努めたのに対し、山名は主観的な記述が散見される。
- 10) こうした例は枚挙に暇がないが、例として、嘉治隆 1920「虐げられ資女工生活の面」『先駆』（4）（以下カッコ内の数字は各機関誌の巻号を表す）、新明正道 1920「麵麩の道徳」『同胞』（1）など。
- 11) 「遠近消息」『先駆』（4）、「聲息交響」同（6）、「心と心」同（7）。「投花 東」『同胞』（1）、「同志団林」同（2）、「同志通信」同（7）。

12) セツルメントに関しては福島正男ほか編(1984)を参照にした。

【文献】

- 赤松克麿編, [1934]1999, 『〔復刻版〕故吉野博士を語る』。
- Engels, Friedrich, 1883, *Die Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenschaft*. (1946, 大内兵衛訳『空想より科学へ——社会主義の発展』岩波文庫。)
- 福島正夫ほか編, 1984, 『回想の東京帝大セツルメント』日本評論社。
- 林要, 1947, 「新人会の頃」東京大学消費生活協同組合出版部編『歴史をつくる学生たち』東京大学協同組合出版部, 135-88。
- 彦坂竹男, 1984, 「レジ三年」福島正夫ほか編『回想の東京帝大セツルメント』日本評論社: 132-5。
- 井上義和, 1999, 「第2次弁論ブームの展開と雄弁青年の析出——1900-1930年を中心として」『教育・社会・文化』(6): 53-61。
- 後藤美緒, 2010, 「1920年代の学生と住居——東京帝大新人会の『合宿所』の考察から」『社会学ジャーナル』(35): 45-65。
- 風早八十二, 1922, 「感想」『ナロード』(9)。
- 中野重治, 1954, 『むらぎも』大日本雄弁会講談社。
- 南博編, 1965, 『大正文化』勁草書房。
- 三輪寿壮, 1919, 「むしめがね」『デモクラシイ』(8)。
- 内務省衛生局編, [1921]1970, 『月島調査』光生館。
- 永嶺重敏, 1997, 『雑誌と読者の近代』日本エディターズ出版部。
- , 2001, 『モダン都市の読書空間』日本エディターズ出版部。
- , 2007, 『東大生はどんな本を読んできたか——本郷・駒場の読書生活』平凡社。
- 小熊英二, 2009a, 『1968上——若者たちの反乱とその背景』新曜社。
- , 2009b, 『1968下——反乱の終焉のその遺産』新曜社。
- 大宅壮一, 1929, 「就職難と知識階級の高速度的没落」『中央公論』(3)。
- 蠟山政道, 1919, 「新しく得た一つの喜び」『我等』(1)。
- 佐藤健二, 1987, 『読書空間の近代』弘文堂。
- 新明正道, [1981]1984, 『ワイマール・ドイツの思い出』恒星社厚生閣。
- 思想の科学研究会編, 1959, 『共同研究転向上』, 平凡社。
- Smith, Henry, Dewitt, 1972, *Japan's First Student Radicals*, Cambridge: Harvard University Press. (1978, 松尾尊兌ほか訳『新人会の研究——日本学生運動の源流』東京大学出版会。)
- 桂秀美, 2006, 『1968年』ちくま新書。
- 竹内洋, 2003, 『教養主義の没落——変わりゆくエリート学生文化』中公新書。
- 法政大学大原社会問題研究所編, 1969, 『〔復刻版〕デモクラシイ・先駆・ナロード・同胞——新人会機関誌』法政大学出版局。
- 内村治志, 1925, 「柳島の 〇年」下『東京帝国大学新聞』1925年6月5日付け。
- 横山源之助, [1899]1985, 『日本之下層社会』岩波文庫。

(原稿受付 2009.9.13 掲載決定 2010.11.12)

**Reading Practices of Students between the World Wars:
A Solidarity Transcending the Social Position Held
by the Tokyo Teidai Shinjin Kai**

GOTOH, Mio
University of Tsukuba
mgoto@social.tsukuba.ac.jp

This paper examines the reading practices of the first radicals of the Tokyo Imperial University (1919-1929, Tokyo Teidai Shingjin Kai). By particularly focusing on the idea "From Science to Imagination" that they assimilated through their activities, this paper will explore how these students came to adopt this idea, which is different from the past viewpoints. In doing so, this paper reconsiders the students' social movement between the world wars.

Shinjin Kai was one of the biggest student groups at that time. Many of their practices and social activities influenced the then regime, and their reading practices formed the basis for their actions.

For Shinjin Kai, the reading practices did not merely imply reading but also included the characteristic act of transcending back and forth between the text and the real world. First, the students gained the knowledge by reading the text, and then understood the actual circumstances by communicating with the employees. Following this, they interpreted the then present situation by trying to match the knowledge of the text and the actual situation. Later, they intended to improve the situation by returning to the text again.

Through such activities, they aimed to create a reading community not based on any social attribute, but on the similarity of interest. They interpreted the present situation scientifically using the text, and then developed this interpretation by imagining their new community through the text. In this process, they experienced a reversal of the role of a sender and a receiver, and then, realized that they have to respond to the present state that they try to change through their activities. The reading practices of Shinjin Kai involved being aware of one's internal passiveness.

Key words: Tokyo Teidai Shinjin Kai, the reading practice, the possibility and the failure

(Received September 13, 2009 / Accepted November 12, 2010)